

年間第 1 1 主日の説教

金 大烈 神父 2010年6月13日(日)

《“安心なさい” あなたの罪は赦された》

主の平和！

今日の福音(ルカ 7・36-50)は美しい物語です。皆様この福音を読む時は皆様自身がこの現場にいて、イエス様がこの罪深い女にした行動とかその周りにいる人達の視線などを想像しながら読むともっと実感のある福音の黙想が出来ると思います。今日の福音を読んでいろいろな事を思い出してみました。

この福音の中で登場人物は主に3人います。一人目はイエス様、二人目はイエス様を招待したファリサイ派の人そして三人目は罪深いと言われる女です。この三人の事を黙想するといろいろな事が頭の中に思い浮かびます。罪深い女の人の事を考えてみましょう。どのような経緯でイエス様に会い、その心に触れ、今日のような事をしたかはわかりません。しかし聖書神学者達は姦通の罪を犯し殺される前に救われた女ではないかと言う話もあります。それは、イエス様の復活を最初に発見したマグダラのマリアではないかと言う人もいますが、はっきりした事はわかりません。

今日はこの福音の中に出てくるある町にいる罪深い女だったと言う事をだけで考えましょう。この女の人はこの時、初めてイエス様に出会ったのでしょうか？ 多分以前にイエス様が方々で説教している時や何か行いをしていた時にこの人は人の視線を気にしながら遠くからイエス様の話を聞いていた人かもしれません。もしくはイエス様に直接触れる機会があって癒しの体験をもっている人かもしれません。今回この女性はイエス様がファリサイ派の人の家に招かれたと言う話を聞いてどうしたらいいか考えたんでしょう。この震える心をどうしたら表わし返す事が出来るか考えます。そしてその女はイエス様が到着するしばらく前から家の入口あたりで待っていてイエス様が家に入ると正前から入らず後ろから入り足元に近づき足を見たときたんに涙を流し足に落します。涙は映画俳優でなければ出そうと思って出せるものではありません。何か心に感じる事があったから自然に涙が流れ落ちたのです。彼女はイエス様の足の上に落ちた涙を髪の毛で拭きます。そして自分で持って来た高い香油をイエス様の足に塗ります。別の聖書ではユダが「なぜそんな高い油をイエス様の足に使うのか」と記されています。その姿を想像すると多分彼女は何かを確認したからでしょう。

今日の福音ではっきりしているのは罪深いと言われる人のことです。もし、この共同体の中にあの人は悪い人と言われる人がいた場合、どのような気持ちになるのでしょうか？ ミサと一緒に与りたくないと感じませんか？ しかしそれは違います。この女性の様に恥ずかしさ、人々の視線を乗り越えてイエス様の後ろに近づいてこのような振る舞いを見せたこの女性の心はどこから来たのでしょうか？

昔から霊性神学者が言っている変わらない話があります。それは「信仰の始まりは悔い改めだ。」という事です。悔い改めはどこからくるのでしょうか？ やはりそれは神様からの技です。自分だけで悔い改めようと思ってもそれは自分ではわかりません。悔い改めは自然に心に生じる働きです。頭や感情でコントロールするものではありません。自分の知らないうちにイエス様に出会う体験、その時自

分の中で働く何かを見つけます。罪深い女が見せた心の働きの体験が私達にも欲しいです。これが無いと私達はいつも頭だけで考える生き方だけを見せることになります。

皆様、真の信仰と言え、その人が命をかける位の信仰を持っていると言え、その人には必ず悔い改めの体験があります。その悔い改めは神様に会った事によって可能な事です。その悔い改めの根底に敷かれている心の働きは自分が赦され・愛されていると言う体験です。イエス様、神様に会おう事を難しく考えないで下さい。それは自分が良くない事してきて、いつも見守り赦して下さったので自分が今ここまでやって来られたという確信、そしてこれからどうすればいいかを祈りのよって求める事です。そうする中であらゆるものが感謝の対象になります。この体験が罪深いと言われた彼女にあったのでしょうか。だから人の視線や侮辱される言葉も全部彼女には問題にならなくなりました。ただ自分の心を怖がらないで前に進んでイエス様に今日の事を見せたと思います。イエス様もこの女の人を見て直ぐ彼女の心を見通しました。この人の持っている愛の大きさや信仰がどの位かをお分かり、最後にプレゼントを下さいました。“安心しなさい。あなたの罪は赦されたから。”

皆様、今日の福音をもう一度考えて下さい。自分は赦しを感じているか。皆様、ご自分のことを責める必要はありません。自分を責める人は必ず相手を責めます。何倍も責めます。しかし自分が神様から赦された愛の内にいると言う確信があれば、自分を責める資格が自分にはない事に気付きます。自分を責める事より自分を愛して神様にふさわしい姿を見せる事が正しいである事がわかります。自分を責めないで自分を愛し真に正しく愛する事が出来れば、相手を見る目が変わります。相手に何をすべきか何をあげなければならないか、どういう心を見せなければならないかをすぐにわかります。自分が赦された事がわかれば人を無条件に赦せます。なぜなら赦しは神様からの贈り物だからです。そしていつも赦してもらっているのが私達です。

今日の第二朗読《使徒パウロのガラテヤの教会への手紙》の20章“生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。”この信仰告白が出来ればその人が一番幸せな人だと思います。私もこの言葉には自信がありません。本当に私の中にキリストが生きておられ、自分の存在が無くなる位にイエス様の事を望んでいるのか、渴いて望んでいるのかにはっきり言える自信がありません。しかしこのように素晴らしい告白が私達に出来たら、神様が約束してくれた御国をあらかじめ体験出来るのではないかと思います。皆様の心によって天国にも地獄にも同時に行ける事が出来ます。限りある世の中、出来るだけ私達の心をイエス様がおっしゃったその幸せの道に注ぎ傾かせましょう。それは、私達がやらなくてはならない宿題かもしれません。ファリサイ派の人々を私達が責める必要はありません。なぜならその心が私達の心の中にも同じように存在するからです。ファリサイ派の人の心とこの罪人と呼ばれた女の心とイエス様が見せて下さった心の三つが同時にあると思います。

ありがとうございました。